

# チーム医療の実践者としての スキルミックスのあり方

座長 上野 道雄

第62回国立病院総合医学会  
(平成20年11月21日 於東京)

IRYO Vol. 63 No. 8 (489) 2009

キーワード チーム医療, スキルミックス

医療技術の進歩や、医師不足に対し、従前の医療職の役割分担では、患者の要求に応えることが困難であり、看護職等が専門性を発揮できず、満足な達成感が得られない面も垣間見られる。内閣府の規制改革会議の答申で「医師と他の医療従事者の役割分担の見直し」が提言された。医療環境の変化を踏まえ、チーム医療も従来の縦割り垂直型から、スキルミックス（職種混合）の概念も含んだ水平型のチーム医療への移行が求められている。患者の求める医療を提供する、新たなチーム医療の可能性を考えてみた。

異なる職種で構成される組織では各専門性を生かした情報と考察の集積が重要であり、遂行任務が高度なほど、多岐なほど、あるいはスキルミックスの手法のチーム医療では意志決定時の情報と考察の共有が必要である。国立病院機構九州では院外の専門医を加えた医療事故審議を行っている。医師自身の情報と考察だけで診療方針が決定され、看護職の情報や考察が十分に生かされず事故に至った事例、看

護職がとりあえず情報を伝えるが、更なる情報や自らの考察の伝達を躊躇し、事故に至った事例が散見された。医療は多くの職種で構成される共同体であるが、分業的な垂直型のチーム医療（医師が命じ、他の医療職が実行する）で、職種間の組織的な情報共有が弱い。情報は医師に過度に集中するが、その精度や量は個々の人的資質に依存する危うい情報集積、伝達システムで医療過誤の温床である。すべての医療職が専門性を生かした情報と考察を持ち寄り、合議する（意志決定前のスキルミックス）水平型のチーム医療、情報集積、共有システムの実現が、診療（意志決定の）精度を上げ、患者の要望に応える途と思われる。

その実現には情報、判断の集積や共有を組織的に行うことが必須であり、医療チームでの看護職の役割と重みが増すと思われる。看護職の情報、考察が診療に反映される結果、その情報収集と判断能力が問われ、さらに看護職の専門性も磨かれ、その達成感も期待される。